

日本における平和心理学の発展

—心理科学研究会平和心理学部会20年の活動を焦点に—

杉田明宏・伊藤武彦

(大東文化大学) (和光大学)

はじめに

心理科学研究会(以下、心科研)平和心理学部会は、1986年の国際平和年とそれを記念する「暴力についてのセビリア声明」の発表を含む「第3の波」(古澤, 1988a)の中で、1988年に設立された。

「第1の波」は、古澤(1988a)によれば、第2次大戦中の米国においてゴードン・オールポートが呼びかけて、心理学者2038名が『人間性と平和』と題するマニフェストの署名を行い、日本を含む敗戦国の民主化や、人権が尊重され差別のない大戦後の新しい社会建設を訴えた(Allport, 1945)ことを指す。

「第2の波」は、次のことに象徴される。すなわち米ソ対立を憂えた世界的心理学者達が1961年のデンマークで開催された国際応用心理学会において、チャールズ・オズグッドらのイニシアティブの下、核戦争の危機を防止するための心理学者の役割を真摯に討議し、「心理学者の国際大会として本学会は、核戦争の危機の増大にとっての心理学的諸要因の重要性を強調する。本学会はあるゆる国の心理学者に対して、国際緊張の科学的理解と緊張緩和にエネルギーと専門的スキルをささげるよう要請するものである」という決議を行ったのである(Neilsen, 1962)。

「第3の波」は、1980年代に入っての世界的心理学者の平和研究と平和運動がかつて無い高まりを見せたことを指す。それは、1984年のメ

キシコ・アカプルコで議論された世界平和への心理学者の協力の動きであり、資本主義諸国と社会主義諸国の心理学者の協働が提案されたことである。この経過は寺内(1988)に詳しく紹介されている。

このような国際的な波を受け、心科研における平和心理学部会が産声を上げたのであった。

その後、天皇死去(1989)、湾岸危機(1990)、「平和の文化国際年」(2000)、アフガン攻撃(2001)、等の情勢に刺激を受けつつ、理論的にはセビリア声明(1986)、ヨハン・ガルトゥングの暴力・紛争理論や、ユネスコ・国連の「平和の文化」概念に依拠しながら、活動を展開してきた。すなわち、内外の平和情勢と平和運動、国内外の研究(心理学・平和学)動向、心科研の集団的研究活動、および個人の研究史等に規定されながら、本部会のあゆみは2007年で発足19周年を迎えた。

本論文の目的は、心科研平和心理学部会20年目の節目を迎えるに当たり、同会の歩みを跡づける作業を通じて、日本における平和心理学の発展の軌跡と方向性を考察することにある。

1. 前史:「第1の波」と「第2の波」

先にも述べたとおり、平和心理学部会は1988年に発足し、今日に至っており、2008年には20周年を迎える。

同部会の活動は、平和心理学の組織的な研究運動の一翼をになうものであるが、その日本におけるルーツは、アジア・太平洋戦争敗戦後の民科心

理学部会の活動にまでさかのぼることができる。この時期には、前出の平和心理学研究の「第1の波」および「第2の波」が日本の研究運動に大きな刺激を与えていた。

1948年、日本の科学者たちの戦争加担への反省に基づいて民科心理学部会が発足し、その総決算的成果として乾孝・高木正孝（1957）『心理学』が刊行された。その仕事を引き継ぐかたちで1960年に会員数約20名で全日本心理学者懇談会が発足したが数年で活動は停滞した。その流れの一つがソビエト心理学研究会、もう一つが心研の発足にとつながっていく（村越、1977）。

この時期、心理学界の外側の動向としては、米ソ冷戦下の核戦争の危機を背景とする1964年の国際平和研究学会設立と、翌年の日本平和研究懇談会の誕生、という平和研究の組織化の動きが注目される。

足立（1999）によれば「当時、民科（民主主義科学者協会）の後を受けて、諸科学分野に携わる研究者たちの全国組織として日本科学者会議が発足しようとしていたし、私もその動きに少しづつコミットし始めていた。心理学の世界では、民科の流れを汲む全心懇（日本心理学者懇談会）が残っていたし、ソ心研（ソビエト心理学研究会）が地道な仕事に着手していた。」

1965年に発足した日本科学者会議は、日本の科学者・法律家・研究者を結集して、平和と民主主義のための活動を続け、今日にいたっている。機関誌『日本の科学者』においては、80年代以降平和心理学関連の論文も積極的に取り上げられ、自然科学・社会科学者の中における平和心理学の認知度を高めることに貢献していった。

1966年10月6日に法政大学で開かれた日本応用心理学会第33回大会は、「平和のための心理学」をテーマとして、乾孝と中川作一を中心に組織された。その報告は、乾孝・中川作一（1967）『平和のための心理学』としてまとめられている。本書では第1部で「心理学者はいかに平和に貢献するか」のテーマの下、田中靖政「オスグッドの平和心理学について」、松村康平「平和のための

『関係』心理学」、南博「平和問題の社会心理学」、城戸幡太郎「平和と心理学者」の各報告を収録している。第2部「心理学は国際関係の改善に貢献できるか」においては、Urie Bronfenbrenner「心理学の国際関係改善への寄与についての考察」、Emil Holas, Dona Tollingerova「心理学者「モスクワ円卓会議」（1966）に寄せる提案」、Janusz Reykowski「心理学は国際関係の改善に寄与できるか？」、Milton Rokeach「心理学と国際関係」、George Singer「国際関係の改善に対する心理学の可能な寄与を討論する円卓会議への論評」、Ronald Taft「心理学と国際関係に関する論評」、Tadeusz Tomaszewski「国際緊張と心理学者」、David Belanger「心理学と国際関係」といった海外の心理学者の報告が並んでいる。国内の心理学会の報告でありながら、海外の心理学者の名があるのは、乾と中川が書簡を送り、その返書を紹介しているからである。このことは、冒頭で紹介した「第2の波」が日本における平和研究の本格的始動の契機となったことを表しているといえよう。

また、同じく「第2の波」の反映として、同年には、日本社会心理学会の年報第8号でも「戦争と平和の社会心理学」の特集が組まれた。これは、「戦争と平和」研究の現状と方向、研究方法、世論研究という3本柱で構成された。日本の心理学者による平和問題への心理学的アプローチの提起がなされ、西平重喜「国際危機と諸国民の世論」、岡田直之「『安全保障』をめぐる国民世論の軌跡と動向」、田中靖政「核兵器に対する戦後っ子の態度分析に関する一試論」といった研究が報告された。また、ここでは、社会心理学者のみならず、川田侃・加藤秀俊・武者小路公秀・関寛治ら平和学者を招いて、広く社会心理学者や国際政治学者との協働を目指したことが特徴であった。

そして1969年、心理科学研究会が設立された。その「設立趣意書」には、「あたかも科学の装いをもって導き出された人間の認識活動、能力、発達、人格等についての誤った理論や解釈は、さまざまな反動的政策（例えば、教育政策）と結びつ

き利用されてきた」ことへの反省の上に「成果を国民の生活と人類の幸福のために役立て」ことが宣言されている。これに基づく会則においては第3条第4項に「平和と民主主義を守るための活動」が明記された。心科研は、その設立の当初から、人間性を損なう暴力と対峙する価値観に立って、心理学の科学性と実践性を追求してきたといえよう。

70年代の動向で注目すべきことは、1973年の日本平和学会設立であった。これは、前述のような60年代半ばの平和研究活動の組織化の発展として生まれたものである。当初、その研究活動は国際政治学分野の研究者が中心であり、心理学者の参加は少なかった。しかし、平和研究の組織体が日本において設立されたことは、後に心理学を平和研究のネットワークに引き入れていく牽引力ともなっていったという意味で画期的なことであつた。

また、心理学分野では、1977年の「平和を願う科学者の意見調査」が注目される。これは、松本金寿（東北大学）を中心になって小谷野邦子や中川作一ら多くの心理学者が調査を行い、同年の日本心理学会第41回大会（駒澤大学）において報告され、さらに、翌年の第19回国際応用心理学会（ミュンヘン）でも報告された。また、1978年の日本教育心理学会第20回総会（横浜国立大学）において松本金寿は「戦争と子ども：日本の場合」と題して、体験記などの資料に基づく研究発表を行っている（加藤・稻越・田中・安塚・松本・稻田, 1979）。ここで松野豊から、戦後日本での心理学者の課題として被爆者の問題を抜きにすることは出来ないのに、これまでの研究は少なかったということで、被爆者問題を考える心理学者の会を作るよう提案があった。これに答えて松本金寿は、心理学者の平和への関心が弱いので機会を求めてぜひ広く関心ある研究者に呼びかけたいとのべた。松本は、また、国際会議などの経験に基づき平和問題研究への心理学者の参加の重要性を強調したと言う。これは、同年の国際応用心理学会の経験をふまえてのことであろう。

さて、心科研では、1978年11月の秋期研究集会の歴史研究分科会において、足立白朗が、「第2次世界大戦前の教育心理学における研究運動について」という報告をおこなった。この報告は、後に、足立の「第二次世界大戦前後における教育・社会系心理学の展開とその功罪（1）」の研究（足立, 2003）として展開されていく。

1980年の心科研秋期研究集会の青年心理分科会において、荒尾貞一が「戦争についての知識と戦争観」と題する調査報告をおこなった。また同分科会では名古屋市のみなみ子ども診療所で臨床心理学者として勤務していた間宮正幸が「ある“ファシスト・セヴァンティーン”の事例研究」と題して、臨床心理学的ケースを社会状況と結びつけた報告をおこなった。

1983年に中川作一が『心理科学』に投稿した「平和の心理学と“本能論”」（中川, 1983）は、同誌に「平和」の語句を含むタイトルの論文が掲載された最初である。このころから、心科研内部における平和研究への関心が高まってきたと言えよう。

同年の心科研・春期研究集会では間宮正幸の企画による「平和に関するミニシンポ」が初めて開かれた（間宮, 1983）。大泉溥の報告「現代社会と心理学の課題—戦時下における心理学のあり方を顧みて—」は歴史研究の視点からの平和研究であり、渡辺義晴による報告「哲学から見た心理学の問題」は、哲学から心理学への平和研究の提言であった。

このように、平和心理学部会の成立までの間に、その時々の政治・軍事情勢を反映した様々な平和研究の動きが心科研の内外において存在していたことがわかる。

2. 部会成立準備期：「第3の波」と平和のための心理学者懇談会の成立

平和心理学研究の「第3の波」といわれる80年代、米国では、1982年に「アメリカ社会責任ための心理学者の会 Psychologists for Social Responsibility」（PsySR）が発足した。このとき

の呼びかけ人の中には、カール・ロジャーズやロロ・メイなど著名な心理学者が名を連ねている（Wessells, 1996 参照）。PsySR は、その後、米国心理学会に平和心理学部会（第 48 部会）が誕生するまで、米国心理学における平和研究と平和運動に中心的な役割を果たした。

また、英国においては、1983 年の英国心理学会年次大会で、核戦争の問題に対する心理学的見を声明として発表する提起がなされ、学会を挙げての研究プロジェクトが開始された。

1984 年は、日本のみならず、世界の平和心理学の発展において重要な年となった。この年、国際心理学会大会がメキシコのアカプルコでひらかれ、西側と東側の心理学者による連日連夜の討論により、特別決議「平和を求める心理学者」（平和のための心理学者懇談会, 1990, p 154 参照）が可決された。このときの状況は寺内（1986, 1988）が詳しく報告している。その後の具体的展開として、国際心理科学連合（IUPsyS）に平和研究委員会の設置が提案され、それが認められることとなったのである。以後、平和研究委員会は、隔年（奇数年）に研究大会を開催している。

1985 年にはドナウ川流域国際心理学会で平和に関するシンポジウムがあり、日本からは入谷敏男が参加した。また、前述の英国心理学会の核戦争研究の成果を Thompson (1985) が Psychological Aspects of Nuclear War (黒沢訳 1988 「核戦争の心理学」) として刊行し、話題になった。

この年、日本において特筆すべき事は、入谷敏男、稻木哲郎、寺内礼治郎、小谷野邦子、古澤聰司、中川作一、松本孚らが中心になって 12 月に「平和のための心理学者懇談会」（略称：平心懇）を発足させたことである。これには、1984 年の国際心理学会の声明の影響が大きい。ほぼ毎月例会を行い、情報交換や心理学者の平和運動の推進を担ってきた。

以上のような動向については、1986 年の心科研春期研究集会の歴史研究分科会において、伊藤武彦が「80 年代の世界の心理学者の平和運動」

として報告した。

国際平和年となった 1986 年、「脳と攻撃性についての国際コロキウム」がスペインのセビリアにおいて開催された。ここでは、「戦争は人間性に内在するものであるからなくすることはできない」という人間性に関する生物学的悲観主義を打破するために、心理学者を含む自然科学系の研究者チームが、人間性と戦争・暴力に関する総合的・集中的レビューを行い、「暴力についてのセビリア声明」をまとめ上げた。これは伊藤（1988b）によって心科研に紹介された。寺内（1985）が紹介したように、8 月には「ヨーロッパ平和のための心理学者会議」（ヘルシンキ）があり、日本から伊藤武彦と入谷敏男氏が参加した。また、同年の国際応用心理学会においては平和に関するシンポジウムも行われた。

こうした世界の平和研究への気運の高まりは、この年以降、国内の心理系学会における平和企画となって現れた。日本心理学会第 50 回大会（名古屋大学）ではワークショップ「平和と心理学者」が行われ、国際動向が紹介された。日本教育心理学会第 28 回総会（九州大学）では、自主シンポジウム「平和のための教育心理学」が伊藤武彦の企画、松野豊の司会により開催された（伊藤, 1986a）。ここでは、橋口英俊が橋口（1986）の内容をふまえ明治以降の教科書の内容分析や教職志望学生の価値観調査などをふまえ「平和教育の心理学」を報告、渡辺健治が国民教育研究所の中高生の質問紙調査をもとに「中・高生の平和意識形成：広島長崎修学旅行」と題して報告、杉江修治が、中京大学での共同講義を「大学における平和教育と心理学者：教養部総合科目『平和論』に携わって」と題して紹介、さらにカール・ロジャーズの平和への取り組みを村山正治（九州大学）が「心理療法家の平和への貢献：米国の臨床心理学者らの動向を中心に」と題して報告した。古屋健治（山梨大学）の文書による発言もあり、活発に討議が行われた。

心科研では、同年 1986 年の心科研春期研究集会（京都）歴史研究分科会において、ドイツにお

ける反戦運動と批判心理学を紹介した百合草頼二の報告とともに、「80年代の世界の心理学者の平和運動：何故80年代に運動が高揚しつつあるのか」と題する報告を伊藤武彦が行っている（伊藤，1986b）。その年の秋期（東京）研究集会でも臨教審に関する村越邦男の報告と共に、伊藤武彦の報告「ヨーロッパ平和のための心理学者会議についての報告」が行われた（伊藤，1987a）。

1987年には、日本心理学会第51回大会（東京大学）で、ワークショップ「平和のための心理学研究」が平和のための心理学者懇談会の入谷敏男氏の企画で行われた。また、同年の日本教育心理学会第29回総会（東京学芸大学）では自主シンポ「平和教育の心理学」（伊藤，1987b）が行われている。

3. 平和心理学部会創設期：質的転換期としての1988年と昭和から平成への道

1988年3月20日から22日にかけて開催された春期研究集会（東京・読売ランド）において、初めて「平和」の語を冠した分科会：「歴史・平和分科会」が開催された。この分科会は、「歴史研究分科会」からの発展として開催され、内容的に平和心理学部会を準備するものであった（伊藤，1988ab）。当日は、野村勝彦と伊藤武彦の司会で、杉田明宏「近年の子ども・青年をめぐる平和研究の動向」、古澤聰司「平和心理学の構想：本能論と政策論の批判を通して」と伊藤武彦「心科研平和部会の発足と研究課題の提案」の3つの報告がなされた。

この時まで、平和心理学分野の発表は、青年心理分科会、歴史研究分科会の枠で行われてきた。しかし、本研究集会の3月22日の総会決議を経て、正式に「平和心理学部会」が発足した（伊藤，1988ab）。

平和心理学部会の最初の独自活動として、3月22日、研究集会終了後に、会場のよみうりランドで「平和心理学第1回ワークショップ」が開催され、杉田明宏実行委員長はじめ、東北地区から荒尾貞一・菊地則行・野呂元の4名、東京地区

から中川作一、古澤聰司、伊藤武彦の3名、名古屋地区から小田久洋、合計8人の参加があった。この席では、(1) 平和心理学の研究や情報の交換、(2) 研究プロジェクト・グループの結成が討議され、1990年京都の国際応用心理学会への取り組みも提案された（伊藤，1988a）。

それらの成果は『心理科学』第12巻第1号の特集「平和と心理学」として結実し、古澤聰司「平和心理学の構想：本能論と政策論の検討をとおして」（古澤，1988）、杉田明宏「日本の大学生の核兵器、平和運動に対する態度と活動」（杉田，1988）、ローシン・カバチェンコ（松野豊訳）「心理科学と核戦争の脅威」（カバチェンコ，1988）の3論文が掲載された。

この年、もう一点筆すべき事柄は、4月に刊行された青年部会初の共同労作である『かたりあう青年心理学』（心理科学研究会，1988）において、平和心理学部会のメンバー（杉田明宏、伊藤武彦、荒尾貞一）の共同によって「平和を創る」の章が執筆されたことである。

このように「部会」の発足、『心理科学』初の特集、初の出版物の刊行と続いた1988年は、心科研のみならず、日本の心理学における平和研究運動にとって画期的な1ページを開く年となった。

この年、日本心理学会第52回大会が被爆地・広島で開催され、鎌幹八郎によって大会シンポジウム「人間の心と世界平和」が企画された。被爆者研究（リフトン，1971）で著名な精神医学学者ロバート・リフトンが報告し、中川作一が話題提供者（中川，1988）、寺内礼治郎が指定討論者となつた（鎌，1988）。

他方、1988年の9月19日に昭和天皇の危険な病状が報道されて以来、マスコミが連日詳細な病状報道を展開し、「歌舞音楽」が制限されるなど天皇報道一色となり、その状況が若い世代の天皇（制）意識に対して及ぼす影響が平和心理学部会の中で議論となつた。同年の秋期研究集会（仙台）では天皇問題についての大学生の意識調査をしてはどうかという提起が中川作一と伊藤武彦それぞれから独立になされた（伊藤，1989a）。早速、

大学生の天皇意識調査が10月・11月に行われた。三重大学では、学内の天皇制について考えるシンポジウムで、調査の結果を河崎道夫が発表し、中日新聞にも掲載された。

1989年1月7日には昭和天皇が亡くなり、「平成」の幕開けとなった。天皇死去後の第2次調査（天皇イメージ調査）を行った。19大学から2134人分のデータを取ることが出来た。3月25日に平和心理学部会の天皇意識調査検討会が仙台で行われた。集計を中心に行っていた、東北地区の荒尾・片岡・菊地・杉田のメンバーに東京地区の中川と伊藤が合流する形となった。6日後の心科研春期研究集会（東京・八王子）では、初日の3月31日に平和心理学分科会として「天皇意識調査の中間集計報告」が片岡の代理で野呂・杉田・菊地によって行われた。またこれに引き続く第3次調査の質問紙の内容の提案（中川・伊藤案）が伊藤によって提案され、検討された。大学間格差が大きいことや、「無関心」の大学生が多いことが明らかになった。翌4月1日にはこのテーマで『集会特別報告』が全体企画として実施された（伊藤, 1989ab）。前日の分科会の討論をふまえ、伊藤の司会により野呂・杉田の報告が行われた。

その後のシンポジウムも平和に関わるテーマであった。「平和と民主主義と心理科学」は、シンポジストとして河崎道夫・大田令子・古澤聰司の3名によって心科研の科学性と実践性が平和の課題との関連でどのように位置付くかをめぐり、熱心な討議がされた（田代, 1989）。

1989年秋期研究集会（名古屋）の平和心理学分科会（10月20日）では、上杉喬が「天皇調査の報告：文教大学生を対象にした上杉調査から」を報告した。これは、後に上杉（1993）として論文になった内容である。

また、同年の日本心理学会第53回大会（筑波大学）では 小谷野邦子がワークショップ「平和心理学：90年代への課題」を企画した。横山明、稻木哲郎、坂西友秀、伊藤武彦、古澤聰司が話題提供者となり、90年代に向けて平和心理学の研究を進めようという提起をそれぞれに行った。な

お、国際的には、国際心理学会がこの年から隔年で「心理学者の平和への貢献国際シンポジウム」を開くことになり、2007年にはインドネシアで第10回大会が開かれている。

4. 90年代の展開期：『平和心理学のいぶき』から『平和を創る心理学』まで

1990年には、心科研春期研究集会（八王子）において「天皇調査分科会（平和部会・青年部会）」が開催された。

国内学会においては、平和に関する企画として、日本心理学会第54回大会（東京都立大学）で自主シンポ「社会主義と平和：東欧の民主主義運動と心理学の課題」が初日の1990年6月1日にあり、中川作一と伊藤武彦の企画により、高取憲一郎「ハンガリーの歴史心理学」、中川作一「ボーランドの青年の人格研究」、松野豊「ペレストロイカとソビエト心理学の最近の動き」、入谷敏男「東欧諸国の平和心理学研究の特徴」の4つの話題提供があり、宮川知彰と星野命が指定討論を行った。（心科研ニュース21(1), p15を参照）

この年の国際応用心理学会大会（京都）に向けて、平和のための心理学者懇談会では『平和心理学のいぶき』（京都・法政出版）を刊行した。本書は、1990年時点までの平和心理学の研究史がまとめられた本邦初の、しかも英文・和文併記の意欲作であった。その編集委員には、心科研から編集委員として中川作一・小谷野邦子・伊藤武彦・古澤聰司が名を連ねた。執筆面でも古澤聰司が詳細な研究史年表を制作（古澤, 1990 参照）するとともに、渡辺顕治・松本孚・坂西友秀・都筑学が『心理学と核防止』の紹介文を書くなど、心科研会員が全面的に協力した。

国際会議では、国際心理学者会議（新宿）において「被爆者の心理学」の企画をHarari、中川作一、伊藤武彦らが行ったのを初め、奈良での国際異文化間心理学会と京都での国際応用心理学会では、大学の平和教育の発表など、日本からもいくつかの平和関係の発表があった。また、京都の国際応用心理学会は、平和心理学を中心課題とした「政

治心理学部会」が発足するという重要な意義を持つ会議であった (Harari, 1992)。

ところで、1990年8月2日イラクのクウェート侵攻に始まる、いわゆる湾岸危機に対し、11月21日、中川作一・田代康子・伊藤武彦らが、心理学者の平和声明「海外における我が国の軍事協力に反対します」を発表し、心理学界に対し賛同者を求めていった。

1990年の秋期研究集会（名古屋）では、「現代青年の社会・歴史意識と天皇」と題する全体会が開催され、平和心理学部会・青年部会を中心になって1988年以来取り組んできた天皇意識調査に関する最終報告と総合的討論が行われた。中川作一が基調報告、杉田明宏が第1次、第2次調査の結果報告、荒尾貞一が第3次調査の結果報告を行い、横山明・河崎道夫のコメントを得て活発な討論が交わされた（中村, 1990）。

1991年の湾岸戦争開戦・自衛隊掃海艇派遣等の事態の展開の中で、中川らは新聞各紙、『Asahi journal』の意見広告等を通じて広く世論形成に参加しながら、約3300人の心理諸学会の会員に郵送で呼びかけ396筆の署名を得た（中川, 1991）。これらの取り組みは、同年の日本教育心理学会第33回総会（上越教育大）の「教育心理学研究と心理学者の社会的責任」と題する自主シンポジウム（企画：横山明、司会：松野豊）において、その歴史的意義が解明された。ここでは、大泉溥が「15年戦争と教育心理学研究」（大泉, 1991）、小谷野邦子が「戦後の心理学者による平和運動」（小谷野, 1991, 1994）、中川作一が「1991年『心理学者の平和声明』：教育心理学者の社会的責任」（中川, 1991）の話題提供を行い、南博と岡野恒也が指定討論者となった（横山, 1991）。

同年の心科研春期研究集会（八王子）には平和心理学分科会は企画されなかったが、3月27日の歴史研究分科会において三井大相が「大日本帝国海軍における心理学研究」を報告し、心理学者の戦争加担の問題が提起された。

1992年の心科研春期研究集会（東京・八王子）

では1年ぶりに平和心理学分科会が行われ、中川作一から湾岸危機に対する心理学者平和署名運動の報告、伊藤武彦から「暴力に関するセビリア声明」の意義と内容の説明が行われた（伊藤, 1991）。セビリア声明普及の取り組みは、1992年の心科研秋期研究集会（三重・湯の山温泉）でも継続され、ミニシンポで中川が歴史的経過を、伊藤がこの声明の精神に基づく調査研究を発表した。なお、この集会では、平和・歴史研究合同分科会で伊藤が、青年分科会で杉田と中川が、平和問題をふまえた報告を行っている。

1993年の心科研春期研究集会（仙台）の平和心理学分科会では杉田・伊藤・中川（1994）の調査内容が報告された（伊藤, 1994）。

1994年には、杉田・伊藤・中川（1994）の戦争と人間性に関する大学生の意識調査が『心理科学』に掲載されたほか、心科研秋期研究集会（伊香保温泉）の平和心理学分科会では、ビデオ視聴によって遺伝決定論的信念の低減とセビリア声明的人間観の形成を意図した実験結果の報告が杉田からあった（杉田, 1995）。

敗戦50年目の1995年、心科研秋期研究集会（東京・八王子）では歴史研究・平和合同分科会が行われ、小谷野邦子が「日本の敗戦と心理学の再出発」を、三井大相が、戦前と戦後の産業心理学研究を対比して「連続性と非連続性のテーマをめぐって」と題した報告を行った（石井, 1996）。

同年9月4日、沖縄において米海兵隊3人による少女暴行事件が引き起こされ、沖縄社会に衝撃を与えた。その1ヶ月後の10月11日に沖縄の宜野湾市で開催された日本心理学会第59回大会においては、公開シンポジウム「戦後50年と平和：広島・長崎・沖縄」が開催された。その中心となった心科研の会員によって、急遽現地で抗議声明が起草され、シンポジウム会場で提起され、参加者名で採択された。社会的事件に対する抗議声明の発表は心理学会としては異例のことであったが、地元紙にも取り上げられ（沖縄タイムス、琉球新報10/12）、心理学者の社会的責任を果たした画期的出来事となった。

1996年には、ユネスコが91年に刊行したセビリア声明普及用パンフレット(Adams,D編集・解説)を、中川作一の邦訳、伊藤武彦・杉田明宏の編集・解説によって『暴力についてのセビリア声明』として公刊した(アダムズ,1996)。このパンフレットは、ユネスコ国内委員会や日本ユネスコ協会連盟においても邦訳版を作成していなかったため、日本におけるその後のセビリア声明の普及・教育・研究にとって、重要な役割を果たすこととなった。

1997年4月27日～29日の心科研春期研究集会(名古屋)の平和心理学分科会では、セビリア声明をテーマに中川作一が「日本の社会ダーウィニズムの受容と批判」と題した歴史的アプローチの研究を報告、伊藤武彦が「人間性の信念と平和志向との“因果”的分析」という共分散構造分析を用いた統計的アプローチを報告した(伊藤,1998)。

また、この集会においては、平和心理学部会より、部会初の出版物『平和心理学試論』(仮称・当時の出版計画が発表された。これは、10年目を迎える部会の「研究の中間総括と、新たな研究・教育の視点を作る作業を行う」こと、深刻化するミクロ～マクロの平和情勢に対して「心理学研究者集団としての歴史的・社会的責任を果たす」ことを企図した『平和を創る心理学』「まえがき」より)ものであり、部会としての飛躍期のスタートであった。

同年11月には、平和のための心理学者懇談会の企画によって『語り継ぎ未来を拓く平和心理学』(京都・法政出版)が出版された(古澤・入谷・伊藤・杉田,1997)。これは、80年代までの平和心理学研究のレビューを行った前作『平和心理学のいぶき』の続編として、90年代の研究の展開を示すものであった。

ここに書かれた章の内容をもとに、伊藤武彦は心科研秋期研究集会(愛媛)の平和心理学分科会において、「体験学習の平和心理学『日韓平和と交流の旅』とその効果」を報告した。また、中川作一が「歴史的時間を生きる」と題して、歴史認

識と世代の問題を論じた(杉田,1998)。

翌1998年の心科研春期研究集会(熱海)の平和心理学分科会では、杉田明宏が「平和心理学研究の到達点と課題」と題して平和学の概念と平和心理学の課題との関連を論じた(杉田,1999a)。次の秋期研究集会(富山)の同分科会では、「ファシズムと民主主義」の報告を中川作一が行った。また、杉田明宏が「セビリア声明から平和の文化へ」の報告を行い、2000年「平和の文化国際年」への心理学者の取り組みを提起した(杉田,1999b)。

この年は心科研の歴史研究部会のメンバーが『日本心理学史の研究』(京都・法政出版)を出版した。特に古澤聰司が「戦前・戦中日本における心理学(者)と社会」の章において、心理学者と軍事・戦争との関わりを明らかにし、歴史研究の側面から平和心理学に示唆を与えた。

1999年3月には、心科研青年部会が中心になって『新・かたりあう青年心理学』(青木書店)が出版された。本書では、中川作一が「自己像と平和：民主主義とファシズム」の章を執筆しており、人格と平和との関係を論じている(中川,1999)。またこの時期には『平和を創る心理学』の各章の準備が本格化した。1999年の心科研春期研究集会(熱海)の平和心理学分科会では、楠凡之「Positive Peace MakingとConflict Resolution」の発表があり、コメンテーターは中川作一であった(楠,2000)。続く秋期研究集会(会津若松)では、中島常安が「人間行動についての生物学的アプローチの吟味：平和心理学の構築へ向けて」を平和心理学分科会で発表している(杉田,2000)。これら個々の研究は、『平和を創る心理学』の拡大執筆者会議を兼ねた位置付けを有していた。

5. 新たなる挑戦期：『平和を創る心理学』、平和の文化、トランセンド

2000年は国連「平和の文化国際年」であった。この年から現在に至るこの時期は、20世紀を総括し、21世紀を歩み出すにあたり、国際社会の

舞台において「平和の文化」が宣言される一方で、2001年のいわゆる9・11事件と「対テロ戦争」に象徴される暴力の文化が台頭する緊張の時期である。

部会の活動も、世界的な潮流としての平和の文化というアイディアと運動に触発されながら、平和学者ヨハン・ガルトゥングの新機軸である紛争転換(Conflict Transformation)の方法であるトランセンド(Transcend)法を明確に意識した研究・実践へと展開していく。

2000年の春期研究集会(近畿)では、ひきつづき『平和を創る心理学』の構想を集団的に検討する場を平和心理学分科会で設けた。このときは、青野篤子「平和心理学を創る：女性(ジェンダー)の視点から」と白井利明「青年の希望の語り」と戸田有一「いじめ問題と平和」の3本の報告がなされた(杉田, 2001)。

この年9月9日の日本応用心理学会第67回大会総会(神戸親和女子大学)において、同学会が日本の学会としては初めて「暴力についてのセビリア声明」(アダムズ, 1996)を承認した。その翌日にはワークショップ「暴力についてのセビリア声明から『平和の文化』の21世紀へ」が開催された。そのいずれにも、心科研の会員(田中昌人、中川作一、伊藤武彦)が中心的役割を果たした。この年は、また、部会員の尽力で新たな平和の文化に関するNGOが設立され、国際的・国内的・学際的に平和運動・教育・研究の実践が開始される画期でもあった。すなわち、「平和の文化をきずく会」(1月)、「日本トランセンド研究会(TRANSCEND JAPAN)」(11月)、「平和の文化ニュースネットワーク(CPNN-JAPAN)」(12月)である。トランセンド研究会は『平和的手段による紛争の転換』、平和の文化をきずく会は『暴力の文化から平和の文化へ』というパンフレットをそれぞれ公刊したが、いずれも平和心理学部会メンバーが中心的役割を果たした。

2000年の秋期研究集会(北海道)では、伊藤武彦が「平和文化とCPNN」という発表を行った。杉田明宏が『平和を創る心理学』の担当章「子

ども・青年が平和を発見する条件—「役割モデル」を手がかりに』を報告し、一般参加者とともに検討を行った。

2001年の5月、部会初の共同作業は『平和を創る心理学：暴力の文化を克服する』(心理科学研究会編：ナカニシヤ出版発行)の出版に結実した。その内容は表1に示したように、青年期、自己、ジェンダー、ロールモデル、いじめ、紛争解決、攻撃性といった多様な領域にわたるものとなつた。

表1 『平和を創る心理学』(2001) の目次

第1章	攻撃と暴力と平和心理学 (伊藤武彦)
第2章	青少年は社会の希望をどのように語るか (白井利明)
第3章	ジェンダーと暴力・平和 (青野篤子)
第4章	平和の文化と自己形成 (中川作一)
第5章	コンフリクトの解決と平和創造 (楠 凡之)
第6章	いじめ対策から平和の創造へ (戸田有一)
第7章	平和のロール・モデル論 (杉田明宏)
第8章	攻撃と暴力の生物学的根拠と戦争神話 (中島常安)

出版直後の春期研究集会(熱海)においては本書についての合評会的ミニシンポが開催され、心科研としての意義を集団的に検討した(杉田, 2002a)。本書は、既存の研究領域・テーマを平和心理学という文脈で意味づけし直すことによって、新たな研究の契機となりうるものであるとともに、日本初の本格的な平和心理学の教材としての意義を持つものと言えよう。

しかし、それから半年も経たない内に引き起こされた9月11日のアメリカでの大規模テロ事件、およびそれに対する「報復」としての米英によるアフガニスタン攻撃は、世界と日本の暴力の文化を再活性化させることとなった。部会では、アフガニスタン攻撃に反対する署名運動(「平和を希求する心理学者のみなさまへ『心理学者平和アピール』署名の呼びかけ」)を主にネットを通じて

呼びかけた。

この時期は、国内的には過去の侵略戦争観をめぐり歴史修正主義が台頭し、歴史教科書・歴史認識をめぐるコンフリクトが激化していた。この問題への取り組みとして、春期研究集会の全体シンポジウム「心理科学における歴史と時間」において、杉田明宏が「戦争体験の語り継ぎ活動に見る歴史と時間の問題：心理科学的視点とは？」を提起した。また、秋期研究集会（岐阜）において全体シンポジウム「歴史教科書問題」への心理学的アプローチ「私たちが深めるべき課題は何かー」（コーディネーター：三井大相、司会：平沼博将、シンポジスト：荒尾貞一、伊藤武彦、高垣忠一郎）を開催した。

また、この年から、平和心理学研究の裾野の拡大とアイデンティティーの確立を追究するために、心理学内・外のさまざまな研究分野とコラボレーション（協働）する試みを開始した。まず、秋期研究集会（岐阜）の分科会においては、松本孚（順天堂大学）が「非暴力の思想と非暴力トレーニング」の発表を行い（ commenter：高垣忠一郎）、暴力を克服する実践を歴史的に蓄積してきた「非暴力」の思想と方法論に学びながら、平和への心理学的アプローチを検討した（杉田, 2002b）。

2002年の春期研究集会（熱海）においては、伊藤武彦「平和の文化のインデックスについて」や、杉田明宏「9.11事件と若者」という情勢とかみ合った研究・実践の検討をおこなった（杉田, 2003）。この年の秋期研究集会（仙台）からは、発達段階に応じた平和心理学研究の課題を明らかにする方針をとり、中島常安「幼児期平和教育の現状と課題」の発表を通じて幼児期研究分野での平和教育理論の批判的検討を行った（杉田, 2004）。

2003年はアメリカを中心とする連合軍によるイラク攻撃の年であった。心科研春期研究集会（滋賀）においては、能力・学力部会と合同で、国家による心のコントロールとの批判のある文科省『心のノート』の問題を杉田明宏・藤岡秀樹の報

告によって検討した（杉田, 2005a）。

秋期研究集会（松山・道後）では、前年に引き続いて幼児期分野から光を当て、乳幼児部会と初めての合同分科会を開催した。合田千里「朝日保育園における平和教育実践」の発表を中島常安、清水民子のコメントターによって深めた（杉田, 2005b）。

2004年の春期研究集会（熱海）では、児童期の平和教育の課題を検討するために、和光小学校教諭の栗原伸の発表「児童期平和教育の平和心理学的検討：和光小学校平和学習の実践を通じて」を設定した（伊藤, 2006）。秋期研究集会（鳥取）では、「大学での平和教育実践：私のチャレンジ」と題して平沼博将と杉田明宏がそれぞれの大学の授業での平和への取り組みを報告し、青年期後期（大学生）の平和教育の課題を検討した（杉田, 2006a）。

また、この年、心理科学研究会編『心理科学への招待』（有斐閣：2004年）が出版された。「被害と時間」の章（間宮, 2004）において戦争トラウマの問題が論じられた。平和心理学の重要テーマとして位置付けられよう。

敗戦60年目の2005年、春期研究集会（伊豆長岡）においては、青年期前期（中学）での平和教育の課題を、中学校教諭である柏村みね子の「Peace from Our Classrooms～からだ・つながり・自己表現～」の発表を受けて検討した（杉田, 2006b）。なお、発達段階に即した平和心理学的課題の一連の析出作業にはこの集会で一区切りがつけられた。

2005年秋期研究集会（長島温泉）では、高垣忠一郎が「平和と自己肯定観」の発表を行い、臨床心理学領域における平和心理学的課題を検討した（杉田, 2007a）。また、能力・学力分科会においては、「『心のノート』を考える・パート3」が藤岡秀樹によって企画され、愛国心、国定道徳観へと誘導する文科省『心のノート』の問題性を明らかにした。

心科研の外側では、この時期、臨床領域において、ヨハン・ガルトゥングらのコンフリクト

転換の理論・実践とカウンセリング、コミュニティーアプローチを融合させる試みがマクロ・カウンセリングという方向性で結実しつつあり、平和心理学の枠組みに影響を強めていった（井上、2005）。

2006年は、イラク問題、北朝鮮問題、沖縄問題、憲法問題等に見られる平和情勢の悪化という外因、および、部会20年目が間近という内因によって、部会活動の中間総括の取り組みがなされた。すなわち、春期研究集会（伊豆長岡）において、歴史研究部会と合同という形で、平和心理学部会責任者の杉田明宏が「心科研・平和心理学部会20年史の検討」と題して部会の20年の歩みを報告した（荒尾、2007）。

また、「心理科学」第26卷第2号において、部会史上2度目の平和特集「人間の心に平和の礎をきずく」が実現し、杉田明宏「沖縄・平和ガイドの平和心理学的考察」（杉田、2006c）、中島常安「幼児期平和教育の課題：直接的平和教育と間接的平和教育をめぐってー」（中島、2006）、高垣忠一郎「『自己愛』と『自己肯定感』から考える子育てにおける『平和』と『暴力』」（高垣、2006）、という新たな課題・分野における平和研究が登場し、研究分野の裾野の拡大が示された。

秋期研究集会（磐梯熱海）においては、杉田明宏が「沖縄社会の平和へのチャレンジを通して考える平和心理学のシステムティックな方法論の有効性」を発表し、コンフリクト転換、マクロ・カウンセリング、コミュニティー・カウンセリング等を踏まえた、よりシステムティックな平和心理学の方法論が検討された（杉田、2007b）。

おわりに

日本の心理学者は戦後一貫して平和のための研究活動を続けてきた。その研究は、第2次世界大戦の反省に基づいて、民科心理学部会からはじまり、全心懇、ソ心研と引き継がれていた。とりわけ1960年代から平和心理学の研究が活性化し活気づいてきた。大きく平和心理学への研究が

すすむ画期となったのが1984年の国際心理学会による平和問題のシンポジウムの連続開催であった。その影響もあり、日本においては、「平和のための心理学者懇談会」と「心理科学研究会平和心理学部会」において盛んに平和心理学の研究活動がおこなわれてきた。また、1990年のベルリンの壁崩壊と東西冷戦終結とともに、軍事費の減少によって生じた「平和の配当」を原資とする「平和の文化」政策が90年代にユネスコを中心に試行される。20世紀で暴力の世紀を終わらせ、21世紀を平和の世紀に創り上げていく機運が国際社会に高まってきた。1999年のハーグ世界平和市民会議の開催と、そこで採択され、国連総会（1999年9月）に提出された「21世紀への平和と正義のための課題」（通称：ハーグアジェンダ）は、20世紀の総括的意義を持つとともに、21世紀の平和の具体的諸課題を提起した。翌2000年の国連「平和の文化国際年」と、「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化10年」（平和の文化10年）政策により、21世紀を平和の世紀を実現していく国際社会の決意が宣言される。しかし、21世紀、平和の文化の10年がスタートした正にその年に引き起こされた「9.11事件」を契機に、「テロとの戦い」の名において軍事・暴力が優先される事態が生まれ、平和研究・平和心理学は新たな課題に直面した。今日の平和心理学は、構造的暴力理論や平和の文化的運動をふまえて、直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力から消極的平和、積極的平和、文化的平和の形成が課題になっている。その際に紛争を、対話的、非暴力的、創造的に転換するプロセスも重視される、という流れになるだろう。

発足以来、現在まで、心科研平和心理学部会は、少数メンバーながら着実に歩みを続けている。2007年からは、平和のための心理学者懇談会と合同で、東京都町田市鶴川近辺での研究会活動を開始している。また、2000年に発行された『平和を創る心理学』の改訂作業も準備されつつある。1988年の部会設立より20周年に向けて、平和心理学は絶えることなく前進している。

◆謝辞：本稿をまとめるにあたり、古澤聰司氏（法政大学）と中川作一氏（法政大学名誉教授）と荒尾貞一氏（北里大学）に大変お世話になりました。伊藤良子氏（東京学芸大学）と村越洋子氏（大月短期大学）から資料提供を受けました。また、長坂辰氏と久木田隼氏に原稿をチェックしていただきました。記して感謝いたします。

【文献】

- アダムズ、D. (中川作一訳、杉田明宏・伊藤武彦編) (1996).『暴力についてのセビリア声明』 平和文化
- 足立自朗 (1999). 心科研立ち上げ前夜に 心科研ニュース, 30, 3.
- 足立自朗 (2003). 第二次世界大戦前後における教育・社会系心理学の展開とその功罪 (1) 研究代表者 足立自朗 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告: 平成13年度 - 平成14年度 p.111.
- Allport, G. (1945). Human nature and the peace. Psychological Bulletin, 42 (6), 376-378. (平和のための心理学者懇談会 1990 「平和心理学のいぶき」に原文・和訳を再録)
- 荒尾貞一 (2007). 心科研・平和心理学部会 20年史に向けての検討(歴史研究・平和心理学合同分科会、分科会・心理科学研究会 2006年春期研究集会概要) 心理科学, 27 (1), 96.
- 古澤聰司 (1988). 平和心理学の構想: 本能論と政策論の検討をとおして, 心理科学, 12 (1), 1-10.
- 古澤聰司 (1990). のろまな心理学徒からみた科学性と実践性 心科研ニュース, 20 (5), 7-8.
- 古澤聰司・入谷敏男・伊藤武彦・杉田明宏 (1997). 語り継ぎ未来を拓く平和心理学 京都・法政出版
- 橋口英俊 (1986). 連載講座: 平和教育の心理学(全3回) 教育心理, 34 (1) - (3).
- 平和のための心理学者懇談会 (1990). 「平和心理学のいぶき」 京都・法政出版
- Harari, C. (1992). Psychology and international peacemaking in the changing world scene. In U.P. Gielen, L.L. Adler, & N.A. Milgram (Eds.) Psychology in international perspective: 50 years of the International Council of Psychologists. Den Haag: Cip-gegevens Koninklijke Bibliotheek
- 井上孝代 (編著) (2005). コンフリクト転換のカウンセリング (マクロ・カウンセリング実践シリーズ2) 川島書店
- 乾孝・中川作一 (1967). 平和のための心理学 法政大学出版局
- 乾孝・高木正孝 (1957). 心理学 青木書店
- 石井房枝 (1996). 歴史研究・平和合同分科会 心理科学, 18 (1), 59-60.
- 伊藤武彦 (1986a). 自主シンポジウム: 平和のための教育心理学(企画者提案) 日本教育心理学会第28回大会総会発表論文集, s32-s33.
- 伊藤武彦 (1986b). 80年代の世界の心理学者の平和運動 心理科学, 10 (1), 58-59.
- 伊藤武彦 (1987a). ヨーロッパ平和のための心理学者会議についての報告 心理科学, 10 (2), 50-51.
- 伊藤武彦 (1987b). 自主シンポジウム: 平和教育の心理学(企画者提案) 日本教育心理学会第29回大会総会発表論文集, s32-sX33
- 伊藤武彦 (1988a). 歴史・平和分科会報告 心科研ニュース, 19 (1), 7-8.
- 伊藤武彦 (1988b). 歴史・平和分科会 心理科学, 12 (1), 50-52.
- 伊藤武彦 (1989a). 平和分科会 心理科学, 13 (1), 46-47.
- 伊藤武彦 (1989b). セビリア声明と心科研の課題 心科研ニュース, 20 (4), 14-16.
- 伊藤武彦 (1991). 平和心理学分科会 心理科学, 15 (1), 60-61.
- 伊藤武彦 (1994). 平和分科会 心理科学, 16 (1), 71-72.
- 伊藤武彦 (1998). 平和心理学分科会 心理科学, 20 (1), 62.
- 伊藤武彦 (2006). 平和心理学分科会 心理科学, 26 (1), 84-85.
- カバチェンコ、ローシチン(松野豊 訳と解説) (1988). 心理科学と核戦争の脅威: 経験的研究の試み 心理科学, 12 (1), 30-44.
- 加藤隆勝・橋越孝雄・田中潜次郎・安塚俊行・松本金寿・

- 橋田準子（1979）。社会4(522～527) 部門別研究発表
題目・質疑応答・討論の概要 教育心理学年報, 18, 36.
- 小谷野邦子（1991）。戦後の心理学者による平和運動
日本教育心理学会第33回大会総会発表論文集, J9-J10.
- 小谷野, 邦子(1994). 戦後日本の心理学者と平和問題と
のかかわり:その社会的側面から 茨城キリスト教大
学紀要, 28, 33-45.
- 楠凡之（2000）。平和心理学分科会（心理科学研究会19
99年春期研究集会概要）心理科学, 21(2), 41.
- リフトン, R (湯浅信之訳) (1971). 死の内の生命
—ヒロシマの生存者. 朝日新聞社.
- 間宮正幸（1983）。平和に関するミニシンポ 心理科学, 7
(1), 58-60.
- 間宮正幸（2004）。被害と時間 心理科学研究会（編）
心理科学への招待 1996 有斐閣 pp.77-88.
- 村越邦男（1977）。心理科学研究会の歩み 心理科学,
1(1), 46-52.
- 中川作一（1983）。平和の心理学と“本能論” 心理科学,
7(1), 1-11.
- 中川作一（1988）。平和に関する心理学者の責任 日本心
理学会第52回大会発表論文集, s8-s9
- 中川作一（1991）。1991年「心理学者の平和声明」：教
育心理学者の社会的責任 日本教育心理学会第33回
大会総会発表論文集, J10.
- 中川作一（1999）。第6章 自己像と平和：民主主義と
ファシズム 心理科学研究会（編） 1999 「新かたり
あう青年心理学」青木書店 pp.217-291.
- 中島常安（2006）。幼児期平和教育の課題：直接的平和
教育と間接的平和教育をめぐって 心理科学, 26(2),
59-73.
- 中村和夫（1990）。全体会「現代青年の社会・歴史意
識と天皇」 心理科学, 14(2), 60-61.
- Neilsen G. S. (Ed.) (1962). Psychology and international
affairs: Can we contribute? Copenhagen: Munksgaard.
- 日本社会心理学会（編）（1967）。『戦争と平和の社会心
理学』年報社会心理学 第8号 頭脳書房
- 大泉博（1991）。15年戦争と教育心理学研究 日本教
育心理学会第33回大会総会発表論文集, J9.
- 心理科学研究会（編）（1988）。かたりあう青年心理学
青木書店
- 心理科学研究会歴史研究部会（編）（1998）。日本心理
学史の研究 京都:法政出版
- 心理科学研究会（編）（1999）。新・かたりあう青年心
理学 青木書店
- 心理科学研究会（編）（2001）。平和を創る心理学 ナカ
ニシヤ出版
- 心理科学研究会（編）（2004）。心理科学への招待 有斐
閣
- 杉田明宏（1988）。日本の大学生の核兵器・平和運動に
対する態度と活動 心理科学, 12(1), 11-29.
- 杉田明宏（1995）。平和分科会 心理科学, 17(1), 59.
- 杉田明宏（1998）。平和心理学分科会 心理科学, 20(2),
48-49.
- 杉田明宏（1999a）。平和心理学分科会 心理科学, 21(1),
65.
- 杉田明宏（1999b）。平和心理学分科会 心理科学, 21(1),
81-82.
- 杉田明宏（2000）。平和心理学分科会（心理科学研究会19
99年秋期研究集会概要）心理科学, 21(2), 47.
- 杉田明宏（2001）。平和心理学分科会（心理科学研究会20
00年春期研究集会概要）心理科学, 22(1), 66.
- 杉田明宏（2002a）。平和心理学分科会（心理科学研究会20
01年春期研究集会概要）心理科学, 23(1), 65-66.
- 杉田明宏（2002b）。平和心理学分科会：「非暴力と非暴
力トレーニング」心理科学, 23(2), 55-56.
- 杉田明宏（2003）。平和心理学分科会（心理科学研究会
2002年春期研究集会概要）心理科学, 24(1), 51.
- 杉田明宏（2004）。幼児期平和教育の現状と課題（平和
心理学分科会）（心理科学研究会2002年秋期研究集会
概要）心理科学, 24(2), 97-98.
- 杉田明宏（2005a）。「心のノート」を読み解く（能力・
学力分科会+平和心理学部会）心理科学研究会2003年
春期研究集会概要）心理科学, 25(1), 95-96.
- 杉田明宏（2005b）。乳幼児+平和心理学分科会（心理科
学研究会2003年秋期研究集会概要）心理科学, 25(2),
92.
- 杉田明宏（2006a）。大学での平和教育実践：私のチャレ
ンジ（平和心理学分科会、分科会報告、心理科学研究
会2004年秋期研究集会概要）心理科学, 26(2),
80-81.

- 杉田明宏（2006b）。Peace from Our Classrooms：からだ・つながり・自己表現（平和心理学分科会 心理科学研究会 2005年春期研究集会概要）*心理科学*, 26 (2), 91-92.
- 杉田明宏（2006c）。沖縄・平和ガイドの平和心理学的考察*心理科学*, 26 (2), 30-47.
- 杉田明宏（2007a）。平和と自己肯定感（平和心理学分科会報告、心理科学研究会 2005年秋期研究集会概要）*心理科学*, 27 (1), 88.
- 杉田明宏（2007b）。沖縄社会の平和へのチャレンジを通して考える、平和心理学のシステムティックな方法論（平和心理学分科会報告、心理科学研究会 2006年秋期研究集会概要）*心理科学*, 27 (2), 72-73.
- 杉田明宏・荒尾裕一・伊藤武彦（1988）。平和を創る 心理科学研究会（編） かたりあう青年心理学 青木書店 pp.193-238.
- 杉田明宏・伊藤武彦・中川作一（1994）。戦争と人間性に関する日本人大学生の意識調査：社会ダーウィニズム的信念の実態と戦争防止への態度の関連 *心理科学*, 15 (2), 28-38.
- 高垣忠一郎（2006）。「自己愛」と「自己肯定感」から考える子育てにおける「平和」と「暴力」*心理科学*, 26 (2), 48-58.
- Thompson, J. (1985). Psychological Aspects of Nuclear War (ジェイムズ・トンプソン著 黒沢満訳 1988 『核戦争の心理学』西村書店)
- 田代康子（1989）。シンポジウム：『平和と民主主義と心理学』*心理科学*, 13 (1), 50-53.
- 寺内礼治郎（1985）。反戦平和研究の一視点 *心研ニュース*, 16 (3), 9-12.
- 寺内礼治郎（1986）。戦争と平和の諸問題：心理学の立場から 中央大学 白門, 10, 35-40.
- 寺内礼治郎（1988）。心理学から見た平和論と平和研究 *教育学論集*, 30, 37-66.
- 鎌倉八郎（1988）。シンポジウム「人間の心と世界平和」日本心理学会第 52 回大会発表論文集, (22).
- Thompson, J. (1985). Psychological aspects of nuclear war. The British Psychological Society. トンプソン (黒沢満訳 1988 核戦争の心理学 西村書店)
- 上杉喬（1993）。天皇・天皇制についての意識調査 人間科学研究（文教大学）, 15, 148-161.
- 横山明（1991）。自主シンポジウム：教育心理学研究と心理学者の社会的責任（企画者提案）日本教育心理学会第 33 回大会総会発表論文集, J9-J10.
- (2007 年 11 月 1 日受稿、2008 年 1 月 13 日受理)

Development of peace psychology in Japan:
With special focus on the activity of Division of Peace Psychology, Japanese
Research Association of Psychological Science

Akihiro Sugita (Daito Bunka University)

Takehiko Ito (Wako University)